

---

# 好き好き大好きアイシテル

木村よし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

好き好き大好きアイシテル

### 【Nコード】

N3616J

### 【作者名】

木村よし

### 【あらすじ】

幼馴染みの涼に片想い中の渚。そんな二人の前に佐々木さんという可愛い女の子が現れて……！？渚の恋はどうなるの？

チビでポチャ子な渚の、キュートでちょっと切ないラブコメストーリー 1/18更新。

「あの、俺…ユリちゃんのことを…」

「リヨ、ウくん…」

「す、好き、」

「リヨウたんみいーっけっ!!」

あたしの声でびくりとする可憐な女の子。

と、またかとげっそりとした顔を向ける林中涼ことリヨウたん。あたしの大大大好きな幼なじみ!

「あつ、私…ごめんね」

走り去るユリちゃん。

私はリヨウたんの告白を阻止できた達成感で思わず笑顔になる。

「リヨウた」

「お前なあ…」

一気に機嫌の悪くなったりリヨウたんの声に、あたしは錆びたロボットみたいにギリギリと首を動かしリヨウたんの顔を見上げる。

「なんで毎回毎回邪魔すんだよ!」

怒った。

リヨウたんが怒った。

「俺の恋路をお前は何回…」

「だってあたしがリヨウたんのことだーい好きだもん！」

あたしはリヨウたんの言葉を最後まで聞かずにリヨウたんの腕にぎゅっと抱きついた。

ぎゅっぎゅって。

細いけど筋肉がついたリヨウたんの腕が私は大好き。

「リヨウたん好きい」

「…ったく…行くぞ」

ため息を吐きながらも、リヨウたんはいつも私を本気で怒りはしない。

「ラジャー！」

だから今も腕にぶらさがったまんまの私の頭にポンと手を乗せて、中庭から校舎の方へと歩き出した。

好き好き大好きアイシテル

早片渚、17歳。

17年間の片思い継続中の149センチの女子高生！  
もちろん片想いの相手は…

「リヨウたんーん！！」

帰り支度をしていたリヨウたんにながりと飛び付く。

「いてっ！てめえの鞆キーホルダーだらけで凶器なんだよ！」

そう言いながら私を背中から離すと、リヨウたんは私の鞆で負傷した頭を擦っている。

「えへへえ、ごみーん」

「お前全く反省してねえだろ」

「リヨウたん今からケーキ食べに行くのだ！！」

最近学校の近くにできたお洒落なカフェがある。  
どうやらそのケーキは噂ではとっても美味しいらしい。

「はあ？今から？」

「イエッさあ！今から！」

渋るリヨウたんをあたしはぐいぐい引っ張った。

そう、片想いの相手はもちろん彼、リョウたん。

身長172センチと在り来たりなスタイルに、短めの黒髪をワックスで軽く遊ばせている在り来たりな髪型、二重の目は大きすぎず小さすぎずと在り来たりなイマドキの顔。

と、まあぶっちゃけ全てが人並みなリョウたんですが、あたしの大切な幼なじみ、あたしには誰よりかっちょいいヒーローに見えてしまうのです！

二学期が始まって間もない放課後。

まだ日差しは強くて暑い日が続いている。

「おい、離れろ、暑苦しい」

カフェへ向かう途中。あたしは当たり前のようにリョウたんの腕にしがみついている。

「もお、照れちゃって、かわいい」

「しばくぞ」

「リョウたんこわーい！」

「じゃあ離れ」

「やだ」

いつも通りの会話。  
いつもこんな感じ。

あたしは絶対リヨウたんから離れない。  
暑くても、汗かいても、化粧が崩れても。

「えへへ、ケーキ楽しい」

にかつと笑ってリヨウたんを見ると、リヨウたんは眉を少しハの字に寄せて仕方ないなあと微笑んだ。

ああ。

やっぱりリヨウたん好きだなあ。

カララン…

「いらっしやいませ」

結局腕にしがみついたまま二人で歩いて、10分くらい歩いた。駅より少し南側の筋にできたカフェ。外からはなんだかハイジの家みたいだと思った。

こじんまりとした店内に入ると可愛いウエイトレスさんがお出迎えしてくれた。

あたしとリヨウたんはまず入口近くのショーウィンドーに近付き、ケーキを選ぶ。

莓タルトにオペラ、モンブランにベリーのムースケーキ…

ああどれも美味しそうだ！

「おい、決まったか？」

ショーウィンドーの端から端を行ったり来たりするあたし。

「まだ！まだ決まんない！」

「早く決めろよ」

さあ迷う。

苺のタルトか、バナナとキャラメルのタルトか…

迷う。

どっちにしよう…

「あと三秒」

「ひえ？！ちよっ」

「さーん」

「やっ」

「にーい」

「リョっ」

待ってくれないリョウたんのカウントダウン…

「いー」

「苺タルト！！」

もう究極の選択。

ああ…でもバナナとキャラメルのタルトも食べたかった…

「よし。じゃあ俺はバナナとキャラメルのタルトで」

え…？

「リョウたん…？」

「お前これも食べたかったんだろ。仕方ねえからちよつと分けてやるよ」

「畏まりました。席までご案内させていただきます。」

係のお姉さんが私とリョウたんの前を歩いていく。

あたしはリョウたんに抱き付かず ゆっくり付いていつて。

その間ずっとリョウたんの顔を見ていたら、リョウたんが視線に気付いてこっちを向いた。

「ん？どうしたんだよ？」

あたしは何も言わずに首を横にふる。

「変なやつ」

そう言っ て笑ったリョウたんの顔はすごく優しかった。

リョウたんは小さい時からずっとあたしの側にいた。

幼なじみよりももっと深い仲で、あたしのことはなんでも知ってる

んだ。

誰よりもあたしのことをわかってくれていて。

あたしはやっぱり

リヨウたんのことが大好きだと感じた。

美味しいケーキを食べて、帰り道を並んで歩く。

夕陽で伸びた影は、あたしがリヨウたんの腕にまたしがみついていたからなんだか怪獣のような歪な形になっていた。

「ケーキ美味しかったね！」

「ああ、そうだな」

「リヨウたん」

「ん？」

「あたしたちカップルに見え」

「見えない」

もぉー相変わらずリヨウたんはシャイボーイだなあ。

「リヨ」

「林中くん？」

え？

立ち止まり声のした方を振り返る。

そこには夕陽を背に、華奢なあたしたちの学校とは違う制服姿の女の子が立っていた。

「ああ！やっぱり林中くんだあ！」

嬉しそうに駆け寄ってくる彼女。

ミルクティー色の長い髪がふわりと揺れた。

スカートから見える足が細くて、チビでぽっちゃりなあたしは羨ましいなあって思った。

「佐々木？」

「うん！覚えててくれたんだ？嬉しい」

そう言っただけで笑った佐々木さんの顔があまりにも可愛くて、嬉しそう  
で、私はなんだか面白くない。

「リョウたん…誰？」

「あつごめんなさい。妹さん？」

妹

妹

妹…

優しい笑顔を見せた彼女には何も悪気はない。  
わかってる。

でも妹って…

「違います。恋び」

「ただの幼なじみだから。」

私の言葉をすかさず遮るリヨウたん。  
ちえ、

別に恋人って言ってもいいじゃん…。

「あ、そうなんだあ。良かったあ」

ん？

あたしは佐々木さんの方を見た。

なんで、『良かった』なの？

相変わらず可愛い笑顔の佐々木さん。

どうしてかわからないけど、嫌な胸騒ぎがする。

「私、佐々木絵美子って言います」

「前のバイトで一緒だったんだ」

「…あ、あたしは早片渚っていいいます」

名前を言いながら、あたしはリヨウたんの制服のシャツをぎゅって握った。

「佐々木はまだバイト続けてんの？」

「うん、まだ頑張ってるよ。それが店長がね…」

夕焼けが段々と焼けるように目に入ってくる。  
うつすらと紫に傾きかけた空には、ちらちらと弱い星が見え始めている。

リヨウさんと佐々木さんは楽しそうに前のバイトのことを話し始めた。

あたしの知らない話。

あたしの知らないリヨウさんの話。

あたしはなんだかリヨウさんが急に遠くに行ってしまうような感覚に襲われて、ぎゅっと掴んでいたシャツを引っ張った。

ぎゅっ。

ぎゅっ。

だけどリヨウさんは全くそれには気付かずに、  
佐々木さんと楽しそうに笑い合っていた。

「メアドも番号もそのままだから、また良かったら連絡してね」

「オッケー。俺も変わってないし」

「じゃあまたメールしていい？」

「おう。」

そうやって最後に手を振りあつて、佐々木さんとは別れた。  
別れる時に佐々木さんは私にも会釈をしてくれて、  
良い子なんだなって、素直にそう思った。

だけ…

「何機嫌悪くなつてんの？」

「…別に悪くないもん」

「…そおですか」

歪な怪獣だった影が、今はひよろりひよろりと二本並んでいる。  
それはそろそろ暗くなってきたコンクリートに飲み込まれてしまっ  
そう。

「…リョウたん」

「何だよ？」

「佐々木さんのこと…好き？」

「は？別に嫌いじゃないけど」

「…あたしは、リョウたんが好きだよ」

「はいはい」

「…リョウたんのばあか」

「はいっ！？」

リョウたんは前を向いたまま軽く流した。

あたしは毎日言ってる。

好き。

大好き。

リョウたんが好き。

けどリョウたんは、絶対に言ってくれない。

好きって。

あたしはいつも気にしないフリをする。

リョウたんはシャイな男の子だからなんだ。

リョウたんの告白は、あたしの気を引きたいからなんだ。

そう

自分に言い聞かせる。

けどね、本当はすごく不安なんだよ。

あたしのことは、どう思ってるの？

ずっと幼なじみのまんま？

あたしは女の子にはなれない？

佐々木さんのこと、

好き？

あー駄目だ。

あたし完全におかしくなってる。

佐々木さんのこと、気にしすぎだ。

今はまだ、何も分からないんだから。

あたしはリョウたんの想いを貫いていくしかない！

その後は、お互いテレビやテストの話をしながら、家に帰った。  
家に着いた時には、もう空には大きなお月様がゆったりと光っていた。

「んー！わかんないよお！」

中身を飲み干してしまったグラスが、足をバタつかせた拍子にカタンと音をたてる。

さっきまでオレンジジュースで橙色だったグラスは、今はうつすらと底に残っているくらいだ。

「だーかーらー！このxに6を代入すんだよ！」

暴れるあたしに負けないくらい、リヨウたんは大きな声を出す。

今はリヨウたんの家で、今日でた数学の宿題を一緒にお勉強中なのだ。

ただあたしはどうも理系は苦手で…あたしの問題集はリヨウたんの解説のメモでカオスだった。

「ねえリヨウたん、やっぱりわかんない…」

「あーだからな？このxに」

「違う！違うよリヨウたん！」

「…なんだよ？」

リヨウたんの眉間に皺が二本刻まれる。

「なんで、6ってこんな形なのかなあ…？」

「は？」

何言っただこいつ的な顔をするリョウタンに、あたしは体ごとがばりと向き合う。

「だっておかしいじゃん！なんで変なカーブ描いてんの？」

「あの」

「あつ9と逆さまなのは何か意味があるのかなあ！？」

「なぎ」

「6と9にはじゃあどついう、」

「だあー！！！！もうしょうもないこと考えずにちゃっちゃかやりやがれ、この、手のり豚あ！！」

「て、手のり豚！？」

ぎゃーっと叫んだりリョウタンの一言に、あたしの頭にハテナが三つ浮かぶ。

「手のり、豚って、何なのさ……」

「お前、手のり豚知らねえの？」

「知らない」

手のり豚とか初めて聞くんですけど。

「ハムスター」

?!

ハムスターですと?!

「お前の丸い顔、まんまハムスターだろ」

さも当たり前のように言うリョウたん。

「ハムスターつつたらちよつと可愛すぎるだろ?」

ハムスター…

丸い顔…

「だからお前には手のり豚が丁度いいって」

手のり豚…

豚…

ぶた…

ぶ…

た…

「ってあれ?もしかして怒った?」

リョウたんがあたしの顔を覗き込む。

あたしはほっぺを膨らませてそっぽを向いた。

「別に…怒ってないもん!」

「怒ってんじゃない。膨れっ面して」

「怒ってない!」

「ほらほら、なんか頬袋の中が種だらけの手のり豚になってんぞ」

「なっ!？」

あたしはぐるりとリヨウたんの方を向いて、がばりと飛びかかった。

リヨウたんの肩を押す形になって。

「わっ」

リヨウたんが仰向きの形で後ろに倒れる。

「手のり豚じゃな、い…」

あたしは今になってこの体勢がどんなものか気付いた。

倒れたリヨウたんの上に跨がるようにして、リヨウたんの顔の両脇に手をついているあたし。

リヨウたんと目が合う。

ドクリ。

「手の、り…ぶ…」

リヨウたんの顔がすぐ下にある。

ドクン。

ドクン。

「リヨウたん…」

ドクドクドクドクドク。

「あたし…」

ブルルルルブルルル

「あ、俺のだ」

悪いとリヨウたんはあたしを上からどけて、側に置いてあった携帯を手に取った。

あたしは  
まだ顔が熱い。

「もしもし、佐々木？」

え？

記憶に新しい名前があたしの耳に入る。

あたしはリヨウたんの話す声に無意識のうちに耳を傾けていた。

「あ、いいって」

「んーん、全然。暇してたから」

暇じゃなくてあたしと一緒に勉強してたじゃない。

「マジで？大丈夫？」

一瞬、リョウたんの声のトーンが低くなる。

何？

「いや、本当に」

「俺は全然いいからさ」

「分かった。そこで待ってて」

何なの？

「すぐにそっち行くから。じゃ」

そう言って電話を切ると、リョウたんは立ち上がった。

「リョウたん？どうしたの？」

「悪い、ちょっと出掛けるから今日はここまでな。」

はい？

「え？ちょっと待ってよ、なんで、佐々木さんなんでしょ？」

「ああ。なんか今バイト終わったところらしいんだけど、店の前で男が結構たむろってるらしい。」

リヨウたんが前バイトしてたのが駅からちょっと離れたファーストフード店だったから、多分佐々木さんの今のバイトもそこだ。

「そんなの、」

「ちよつと心配だし、駅まで送ってくるわ」

「ちよつとリヨウたん！勉強は？まだ途中じゃん！あたしリヨウたんがないとできない！」

あたしより佐々木さんを取るの？

佐々木さんの方があたしより心配なの？

「我が俤言つなよ。明日俺がやったやつ写させてやるからさ」

「なんで？男がたむろってるだけでしょ！？別に店に誰もいないわけじゃないじゃない！別にリヨウたんが迎えに行かなくても佐々木さんは…」

「うるせーなっ！佐々木はお前と違うんだよ！」

なに…？

違、う…？

「お前だったら別に一人でも大丈夫だと思うけどな、佐々木はお前と違って華奢だし弱いから心配なんだよ。分かれよ、それくらい」

「リヨ、ウ、」

「じゃ行ってくるから。適当に帰ってくれてもいいし。あっ、お前が待っててくれたら帰ってから続き再開しよおぜ」

そう言うと、リヨウたんはもう一度「じゃあな」って言うてから部屋を出ていった。

少ししてから窓の下で自転車が走っていく音がして。

リヨウたんは行ってしまった。

「な、なんなのさあ。本当失礼しちゃう！」

大きくないちゃぶ台の上に広がる問題集とノート。  
あたしのものとリヨウたんのもの。

「人を手のり豚扱いしてさあ。あたしだって立派なレディなんだかんねえ」

変に明るいあたしの声が、他に誰もいない部屋に響いた。

ノートの横に転がっているシャーペンと消しゴムをペンケースにしまう。

「佐々木さん佐々木さんってさあ。どおせあたしは、佐々木さんみたい……」

ポタリ。

ポタリ。

ノートに丸い染みができていく。

「どおせあたし、は、佐々木さ、ん、みた、いに…華奢でも…可愛くも、ない…です、よおだ…」

ペンケースを握りしめる。

リヨウたんが可愛いって言ってたから買った、お気に入りのペンケース。

「さ、佐々木さん…みたいに…ヒック…可愛く、な…」

文字が滲んでしまったノートを閉じて、問題集と一緒に鞆に入れた。

リヨウたんは

あたしのことを知ってる。

誰よりも知ってる。

だけど一番大切なことは分かってくれないんだ。

リヨウたん。

あたし

幼なじみだけだね。

一人の女の子でもあるんだ。

佐々木さんと同じ

女の子なんだよ。

可愛くなくても

恋するし。

細くなくても

弱いんだ。

あたしは鼻水と涙をゴシゴシ擦ってから、  
鞆を持ってリョウさんの部屋を出た。

「おっはよ渚！」

あと5分で朝のホームルームが始まる教室は、がやがやと賑やかだ。

「おっはー！美代ぼん」

鞆から一限目の授業の用意を取り出しているあたしの横にやってきたのは、中学からずっと仲が良い中原美代。美代ぼん。

「昨日出た数学の宿題やった？」

美代ぼんは、自慢の長い綺麗な黒髪を指先でクルクルと弄りながら聞いてきた。

「あー途中までならやったよん」

「途中までなんだ？珍しいじゃん。いつも最後までやってるのに」

「あ、あたしだってそういう時くらいあるよーだ」

考えたくない昨日の出来事が頭の中で甦る。

あたしは表情が崩れないように頬の筋肉にぐいと力を込めた。

「……林中と何かあった？」

……。

流石に四年も一緒にいれば鋭くなるか。

「や、やだなあ！何かあればいいんだけどね！チューとかエッチとかあ！？あはは」

馬鹿みたいな笑い声がカラカラ響く。

その笑い声に美代ぼんは「ふうん」と何処か不満そうに唇を尖らせた。

あたしの席は廊下側から二列目の一番後ろの席。

もうすぐでチャイムが鳴るといふ時、ガラッと教室の後ろの扉が開いてリヨウたんが入ってきた。

「はよ。」

時間ギリギリで入ってきたリヨウたんは、鏡を一度も見えてないのか、右側の髪がびよこんと跳ねている。

「おっは！リヨウたん！」

「おはよ、林中」

「リヨウたん、ちょっとしゃがんでえー」

あたしは通り過ぎようとしたリヨウたんの腕を捕まえた。

「ん？」

リヨウたんは不思議な顔をしつつ、少し腰を低くしてくれる。

「ほら、ここ。跳ねてるよ」

言いながら、ぴよこんと跳ねている髪を優しく撫で付ける。

「マジで？ 渚、鏡貸して」

あたしはポケットからいつも持ち歩いている小さなコンパクトを取り出してリヨウたんに渡した。

「うおー発芽米じゃん。だっせえ。」

「ワックス持ってるよ！ 貸したげよっか？」

「いや、俺も持ってる。あ、そーだ」

リヨウさんはコンパクトをあたしに返すと、使い古した鞆からノートを取り出した。

「これ、昨日の宿題の残り。写して分かんないところあったらまた教えるわ」

「わーい！ 助かるよお、リヨウたんやっぱ大好きい！」

ノートを受け取ってペラペラと捲ると、昨日やらなかった問題まで綺麗に解かれていた。

「昨日途中で抜けて悪かったな。また何か埋め合わせするし」

「そうだよー何か奢ってもらうからなあ！」

覚悟しとくとリヨウさんが苦笑いしたところでチャイムが鳴って、

リヨウたんも美代ぼんも各々の席に戻っていく。

あたしも自分の席について、コンパクトを覗いた。

丸い顔。

ちよつと玉になったマスカラ。

二重だけど大きくない目。

元気そうな笑顔。

あたしの顔。

「…うん。今日もいい笑顔笑顔」

明るいのが取り柄だし。

ちつぽけなことは気にしない。

さっきも上手く笑えてた。

ブーブーブー。

「メールだ」

机の上にあった携帯が震えて、メールの受信を知らせた。

「なっ!？」

メールはリヨウたんからで、内容は

『何自分の顔見て微笑んでんだよ。手のり豚ちゃん（　　）』  
って。

リヨウたんの方を見るとリヨウたんもこっちを見てたみたいで、目が合って二人でくすりと笑った。

失礼な内容だけど。

あたしはこんな些細なことでも幸せになっちゃうんだ。

あたしは幸せ。

そのまま何事もなく普段通り午前の授業が終わって、昼休み。

あたしの机の上には二人分のお弁当。

あたしのと、美代ぼんの。

あたしのお弁当箱が二段弁当なのに対して、美代ぼんのはずっと小さい一段弁当。

中に入ってるのは二つのおむすびと、色とりどりの具。  
可愛い女の子のお弁当。

美代ぼんは唐揚げにお箸をぐさりと刺して、あたしの話を聞いていた。

「佐々木…ねえ…」

美代ぼんは何かを考えるように唐揚げを咀嚼する。

ちょっと大きかったんだろうな。

「…別に、気にしてないもあんな。」

あたしが話しているのはまさに昨日の出来事。

美代ぽんに半ば強制的に説明させられてます。

部屋で勉強していたら佐々木さんから連絡があつて。

リヨウたんにちょっとキツイことを言われて。

あたしは一人でリヨウたんの部屋を出たこと。

「林中に言われた内容のとこ、どう見ても渚が気にして無いようには見えなかったんですけど」

「う…」

「ねえ、渚」

美代ぽんは唐揚げを飲み込むと、お箸を置いてあたしの顔を見た。

どことなく、

真剣な眼差し。

「もう諦めたら？」

「へ…？」

急に何言い出すのさ。

「な、なんで。美代ぽんはいつもあたしを応援して」

「林中は無理だよ」

美代ばんはいつもあたしの恋を応援してくれていた。  
笑いながら、頑張れって。

だけど今は、  
きっぱりとした口調だった。

「ずっと思ってた…。林中にとったら渚は幼なじみの。今までも、  
これからも。」

「そんなことない！リヨウたんは恥ずかしがりやさんなだけで」  
「いい加減現実を見なよ！あんただって分かっているはずだよ。」

「ちが、う」

口がゆるゆると動く。

「男は林中だけじゃないよ、渚。他の奴にし」  
「違う！大丈夫だもん！」

気が付いたら大きな声を出していて。  
教室の中にいた人たちが何人かこちらを見た。

「渚」

「あたしは幸せだもん。今も幸せだもん…！」

朝もメールくれた。  
馬鹿な内容だったけど、嬉しかった。

「あたしには…リヨウたんだけだもん…」

「…そんなこと言う美代ぼんなんて、嫌いだ…」

「渚…」

美代ぼんは困ったように呟いた。

二人の間に、居心地の悪い沈黙が流れる。

お互い、何も言わずに残りのお弁当を食べた。

「渚、今日ミリアの新曲の発売日じゃん。帰り店寄っていこうぜ。」

終わりのHRが終わってガヤガヤと教室から人が出ていく中、リヨウたんがあたしに駆け寄ってきた。

「え、そうなの!？」

ミリアはリヨウたんが好きな女性アーティスト。  
あたしもリヨウたんの影響で結構好きだった。

「なに、お前知らねえの？相変わらず疎いなあ」

「えへへ、リヨウたんが教えてくれるから別にいいんだもん」

あたしはリヨウたんから誘って貰ったことが嬉しくて、リヨウたんの腕に抱きつくと、二人で教室をでた。

学校から出て、駅の方まで歩く。

横を向いてリヨウたんを見上げると、今朝跳ねていた髪は綺麗に整えられていた。

「リヨウたん」

「ん？」

「今日は一緒に勉強できる？」

「ああ。このCD買ったなら家帰るしな」

「えへへ…リヨウたんと一緒に勉強頑張るのだあ！」

「お前ただわかんないって騒ぐだけじゃねえかよ」

あたしを馬鹿にするリヨウたん。

でもあたしは、リヨウたんになら馬鹿にされるのは好き。

リヨウたんにだけなら。

「…リヨウたん」

「なんだよ？」

「…あたしって、リヨウたんの」

その時、あたしの言葉を遮るかのように生温い風が一つ吹いて、前髪が上がり、額が剥き出しになる。

何故か急に心細くなって、あたしは途中で言うのをやめた。

「ごめん、なんでもないや」

あたしが軽く笑って首を振ると、リヨウたんは「変なやつ」って言いながら、優しく目を細めた。

それはいつかも見たことのある静かな微笑みで。

あたしはぎゅっと、リヨウたんの腕を強く抱き締めた。

店の中に入ると、よくテレビで流れているJ-POPが流れていた。

「あ、あそこだ」

リヨウたんはミリアのコーナーを見つけるとあたしの腕を解いて駆けっていく。

あたしもその後を追って、少し駆け足で向かった。

「この曲前聞いたけど結構良かったんだよな」

「そうなんだー。あたし聞いたことないかもだあ」

二人でミリアのシングルのジャケットを見る。

白の背景に、スタイルの良いミリアがこちらを振り向いて微笑んでいる。

「リヨウたん買うの？」

「ああ。佐々木もこれ聞きたいつつつてたしな」

突如出た佐々木さんの名前に、あたしの動きが止まった。

「え…リヨウたん、なんで、佐々木さん…？」

できるだけ表情を崩さないように、頬の筋肉を緊張させる。

「ん？あー言ってなかったっけ」

リヨウたんはこっちを向くと、恥ずかしそうに頭を掻いて、

「昨日から付き合ってたんだ、佐々木と」

そう、

言った。

「告ったのは佐々木からだっただけど、いやーなんかバイトの時から俺のこと好きだったみたいでさ」

ちょ、ちょっと。

ちょっと待って。

何、言ってるの？

「佐々木可愛いじゃん？細いし、なんか守ってあげなきゃとか急に思っちゃってさ」

やだ。

聞きたくない。

「あ、そういえば佐々木、お前とも話して仲良くなりたいてって言うたぞ」

ねえ、

あたし今

「なんてったって渚は、俺の幼なじみだしな」

ちゃんと笑えてるかな…？

幸せだったんだよ。

本当に。

だから今だって

リョウさんの隣にいるから今だって

幸せだもん。

美代ぼん。

あたしは

強がつてるわけじゃないからね。

ただ、

今はちょっとだけ

笑顔が上手く作れないだけ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3616j/>

---

好き好き大好きアイシテル

2010年11月16日10時32分発行